

共産同政治機関誌

昭和48年10月20日



第 20 号

◎ 戸村 逆拳と政治責任

共産主義者同盟(再建準備委員会)

戸村選挙と政治責任

1973年10月20日

共産主義者同盟再建準備委員会

労活全国公流集会において、われわれは労活を選挙母体にしようとする企てに反対して一枚のピラを撒いた。この時点で推められていた戸村選挙の動きは、全国各地で進められている種々の労働者の闘いを、選挙によって外的に集約しようとするものであり、その動きの背後にある八派的な政治諸組織の連合による大衆的闘いの乗取りを結果するものに他ならないことをわれわれはこのピラによって明らかにした。そしてわれわれのこのささやかな活動は労活を選挙母体として再編する企てを基本的に挫折せしめたと言ってよい。

(1) 我々の立場

このかぎりではわれわれは労活の右翼的分裂を阻止するという最底限の目的をすでに果たし終えたと考えている。だが問われているのはわれわれがすでに発表した二つの文書でも明らかにしたように、選挙一般の可否などではなく、現時点の日本階級闘争がいかなる段階にあり、さまざまな個別闘争が共通に直面している問題をいかなる方向において打ち破るかである。そして現時点においては、これを選挙による新左翼戦線の統一によって展望しうるとはわれわれは考えないし、むしろこの間の選挙派諸君の動きは、現に存在する諸

大衆戦闘組織の運動にとって阻害的要因となることを指摘してきた。これらの問題点を労活全国交流集会における第一文書においては、労活を選挙母体化する選挙派の動きが、下からの運動体の連合として発展してきた労活運動の生命力を失わせることになるという点から我々は反対し、各闘争組織がその闘いの本質を全面開花させることに全力をつくすし、それを通じて、闘い連合としての労活を再編強化するという本来的労活の方針の再確認を訴えたのである。10・5三里塚集会で発表した第二文書においては、三里塚の闘いが、外部から持ち込まれた選挙によってなら政治方針、運動方針のないまま集約させられることは、三里塚の闘いがこれまで示して来た基本性格からの転換を意味するものである以上、三里塚同盟がこれまでの闘いの総括として闘いの主体責任として提起されるべきものであり、外部からのそれへの提案である場合も、三里塚の闘いの展望のとして政治責任を持って提起されるべきものであることを指摘した。

われわれの選挙をめぐるこれらの問題提起は、労活諸組織や三里塚現地においても基本的に正しく受けとめられつつある。

(2) 八派の選挙策動の破産

八派連合の諸派が背後にあって策動し、政治内容を抜きに政治技術的に選挙によって新左翼を集約しようとした路線は基本的に破綻しつつある。あわててこの「新潮流」に飛び乗った8・25共斗に結集した諸派も、すでにこれをめぐり分裂を開始したし、日和見をきめこんで、この動きに結果を見守っていた中間主義者たち(関西ブント、叛旗派)が、選挙反対を表明しはじめたことは、すでにこの第一ラウンドの決着がついてしまっていることを物語っている。

政治的な決定的な時点において常に政治責任をとりえないこれら雑派が、今回もまた、形勢を視察して、すう勢の定まったときにアリバイ工作をはじめるのはむしろ当然であって、ことさら問題にするにたりない。8・25と関西ブントではアリバイ工作の開始時期の選択において政治キャリアの違いがあつたにすぎない。だが政治責任を明らかにすべき党派は別に存在している。

(3) 構改諸派のはずべき日和見

共労党系諸派はすでに6月段階から選挙方針を明らかにしており、構改派本来の政治路線に戻つたのであり、今回の選挙派の動きの中心となって首尾一貫している。ただ問題は、日共と共通する構改路線への復帰を公然と明らかにするという政治責任を明らかにした態度をとりえなかつた点にある。構改派の基本路線に立ち戻るかぎりでは選挙はかれらの「革命戦略」の中心となる以上、いままら選挙について、あれこれと理由づけをする必要はまったくないし、個々の選挙によって、とりくむことが革命戦線にとって、どのような利害得失があるかをいちいち検討する必要は本来ないのであつて、選挙はつねにとりくむという原則の上でのやり方の問題でしかなく、今回は選挙における無内容を選挙方針の決定

であっても問題がないのである。戸村選挙をめぐる構改諸派の選挙へののめりこみと、われわれの敵対はこう見るとき良く理解しうるのであり、われわれとしては構改派の諸君はかれら本来の道を進んでもらえばよいと考えており、彼らの進む道の前途には代々木への吸収合併がまちかまえていることも疑いないことだと考えている。戸村選挙が、中共派右派からソ連派までの大連合として進んだことは、ミニ代々木党(第三革新政党)へと論理的には取れんする他にない政治内容を持つものであることは、かくして必然なのである。この策動の中心の一つである構改派の諸君は、これらを隠すことなく大胆に提起する政治責任があるのではないか。

(4) 最大の責任者 = 中核派

真に問題にしなくてはならないのは、革共同中核派と第4インターの諸君の一見中間主義的態度である。今回の選挙は一見労働戦線における無党派の人々によって推進されているかのごとき様相を呈している、大衆闘争と異なり純政治行為としての選挙が無党派の大衆組織の指導者によって、政治的に責任がとれるはずもなく、全国的選挙活動も行なわれるはずも本来ない。政治党派が最終責任をとる構造があつてはじめて行ないうると言つてよい。事実戸村選挙においても三里塚の同盟に対して戸村氏の立候補要請を行なつたのは、13名の要請者の一部と革共同中核派及び第4インターの政治局員によってであり、両政治組織とも選挙の中軸であり、真の政治責任はこの両派、なかんずく中核派に在る。この中核派が現在にいたるまでなんの選挙方針も明らかにしえないということははたして何を意味するのであろうか。

(5) 70年代革命斗争と選挙

70年代を内乱の時代と規定する中核派の諸君は、戸村選挙をいかなる政治意味において推進しようとするのか、その選挙活動と革マル派との武装対立の中でどのように展開しようとするのか、中核派の指導部は、60年代後半を戦闘的に闘ってきた革命的な中核派同盟員、同志諸君に明らかにすべきである。この間すすめられている権力と結びついた革マル派の白色テロルに対する中核派の反撃はまったく正しいものであり、中核のこれまでの闘いを精算しないかぎり当然でありむしろ遅すぎたと言わなければならない。

60年代後半の闘いを精算するのでないかぎり、中核派の政治理論がいかに誤っているかと、(われわれはかれらの理論でなく、闘いの実践を評価している)その戦闘姿勢があるかぎり、協同しうる点があるとわれわれは考えている。それらの闘いとどのような関係を持って選挙を行おうとするのかを中核派は明らかにしなくてはならないだろう。

「革命的議会主義」と「内乱の時代」はいかなる関係にあるか中核派の諸君はこれを明らかにしないがゆえに、無党派の諸君と、三里塚をおもてに立て、「革命的議会主義」一般を理由にして、こっそりと選挙を行おうとしたのである。

選挙方針を全然と出さないことによる中核派同盟員への欺瞞はなんら中核派を純化することにはならないし、党派としての党外に対する無責任は中核派そのものの外部からの信頼も失わせるものであって、中核派は政治をやる必然性を明然と明らかにし、これをめぐる政治諸党派の公然たる論争を通じて、日本新左翼総体の前進がありうるのだ。

われわれがこれまで戸村選挙を問題にしてきたのは今参院選挙に立候補を新左翼から立

てることの可否などではない。そのことだけとりあげてみればそんなことはどうでもよいことなのだ。

われわれが問題にしてきたのは、戸村選挙の進められ方の中にひそむ、日本新左翼の体質である。戸村選挙の特徴は一言でいえば「政治的無責任の体制」である。それは選挙の政治責任がどこにあるのか明らかでない形で進行したことにまず現われた。戸村選挙に結集した諸君がどのような政治的意志一致に基づくのが明らかにされてはいない(普通ならば、当然選対形成と同時に選挙綱領が発表されるべきであろう)し、選対のメンバーがいかなる資格と責任において組織されているかが明らかにされていない。このような構造であるがゆえに、これが他に働きかけるときは、選挙は是か否かという二者択一のどろ喝と、加わらない者への「敵としてのレッテルはり」になってしまうのもまた必然であったのだ。

(6) 問題の有効な前進のために

われわれは冒頭に述べた最底限の目的が達せられた以上、これらの選対の諸君に対しては、すでになんら他意を持つてはいない。党派が政治責任を回避した結果としての一つの必然にすぎないのであるから。

このような戸村選挙の無思想と行動は、その背後に政治組織があつてはじめて、理解しうるものである。選対の人々が単なる名義人にすぎず諸党派の連合政治責任において選挙が遂行されるという、前提があつてはじめて、このような選対組織が成立しうるのである。これは形式上は中核派を中心とし、第4インター、構改派、中国派の連合政治指導を暗黙の前提として出発し、事実上は、各政治組織の最高指導部が、名義人の内代表者のコミッサーとして同行し動くという選対の構造が

形成されていたのであり、表面上の政治的無内容は実質的には、党派の政治責任において補完される構造を有していたのである。

われわれの第一文書は、このような実質的構造を前提として、現時点における大衆的闘いの基本構造はいかにあるべきかをめぐる党派間に路線対立を公然化させる目的で書かれたのである。だが選挙派の政治諸党派が態度を明らかにすることができないことを通じて、今回の選挙の本質はわれわれが批判してきたとき政治性格を持つものであることが明らかにされてしまっている。すなわちさまざまな大衆的闘争とは別な次元で、階級闘争の一つの場を切りひろくものではなく、さまざまな大衆の闘いの成果を算奪し、議会主義的政治技術によって集約するものに他ならないものであることが暴露されてきているのである。

政治諸党派が責任をとらないですむという構造そのものが党派の大衆闘争への利用主義的関わりを許してきたし、今回の選挙の構造がはじめから、そのようなことを許すやり方で進められてきたことが問題であったのだ。このことへの無自覚を生んだ無党派選対諸君の無党派であることの甘え、すなわち政治問題に関与するかぎり、たとえ一人であろうと、一つの党派であることを強要されることへの無自覚もまた政治の次元においては許されることではない。だがわれわれは組織として選挙を問題としている以上立ち入るつもりはない。

これらの過程で露呈された新左翼にいまだ根深く残る既成左翼と同根のブルジョア的政治体質こそ、根底的に粉碎されなければならないものである。

(7) 政治の前面に大衆を

参院選挙における新左翼運動の集約ということが基本的に破綻した以上、選挙派の諸君

が推めてきた活動と日本階級闘争に対して有効ななにかに転化するためには、次のような方法しか残されていない。すなわち選挙の名義人諸君は、単なる名義人であることをやめ、公然と自らの政治見解を明らかにして、政治党派や、三里塚などの大衆闘争組織に依拠することなく、選挙をそれらの諸君の独自の戦線の闘いとして孤立してもやり抜くべきであろう。それによつてはじめて、われわれとの違いと共通点は明らかとなり、協同しうる点も明らかとなりうるのである。

これはなにも選挙派の諸君だけが直面している問題ではない。闘う大衆組織全ては、各々孤立しつつ、もっとも階級闘争の最前線として関わざるをえず、既成新左翼はすでにそれらに対して後衛的位置しかもっていないという現状が存在している。それゆえに党派の大衆組織への対応はすべて政治方針抜きで組織的どろ喝以外ではなくなっているものであり、この構造は、大衆的戦闘組織が、党派に対して政治的後衛意識と、政治責任の回避を続けるかぎり続くと言つてよい。

現在問われているのはこれまでの政治の枠をやぶる新たな政治の質をつかみとることであつて、大衆組織と政治党派の旧来の分業関係を打ち破り、新しい次元における分業と協同の関係をつくり出すことでなくてはならない。この意味で、各大衆組織は政治党派からのどろ喝やレッテルはりをおそれることなく、自らの政治見解と責任を明らかにすることが要求されているのである。

労活を構成する諸闘争組織、さまざまな住民運動が現在直面しているのは、個々の闘いからみるかぎりの展望の欠如としてあらわれている。そのかぎり、無党派の活動家の中から、闘いの一本化、結集の一方法として参院選挙が考えられたのは一見無理からぬようにも思われる。だが現在進んでいる闘いの革命性の核心は、そのような一本化とは無関係な、新左翼の表面の政治では補促しきれない

質を持つところにある、このような大衆の闘いが新たなる政治内容として全国的に抽出されてゆくためには、まだまだ大衆的闘いは孤立して極限まで闘われなければならない局面に現在はある。このことへの徹底した認識のみが新たなる政治の質を形成しうる基礎であり、現在最も戦闘的に闘っている闘争組織においては、これが自覚されつつある。政治とは外部から持ちこむものだと知ったかぶりをする者は、放置してよい、問われているのは「外部から」持ちこむことの可否ではなく、持ち込まれる政治の「内容」が問われているのはレーニンの時代も今も変わりはないのだから。

(8) 党派は政治責任を負え！

最後にふたたび新左翼党派の諸君なかんづく中核派の諸君に要請する。選挙をとりくむにあたっての基本的位置づけを、三里塚の同盟の態度まちなどという、政治組織としてはあつてはならない責任回避を行なうことなく明らかにせよ。

新左翼のアラさがしにやっきの革マル派が労活交流集会批判を展開しながらも、選挙問題に口を閉ざしているのは、動力車労組出身の社会党員の選挙をこっそりで行うため、自派へのはねかえりをおそれてであることは公然のことであるが、中核派もその敵である革マル派同様の姑息な政治マヌーバーによって、事態を回避しうると考えているのであろうか。だとすれば、革マルと同様のブルジョア政治の次元に中核派もあることになるのではないのか。中核派の諸君はもし選挙を行なうのであれば、この間の全責任を担って今後遂行すべきであろう。

ローテ 第20号

編集・発行 = ローテ編集局

連絡先 = 200-3422

日本企革

¥50